

3.11 からはや5年以上…、現状は!?

発掘新聞

8月27日号

平成28年度第3号

編集・発行

九州歴史資料館

電話 0942-75-9575

左：役場からみた津波の様子

(2011.3.11)

下：2週間後の浜沿いの集落の様子

(2011.3.24)



「復興事業」にカウントされない「復興事業」

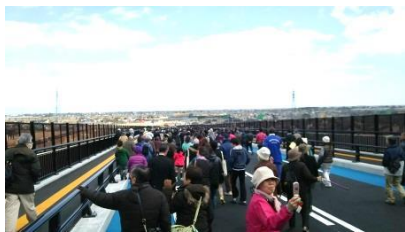
「つばめの杜大橋」も開通した。文化財担当者としても、復興関係の調査はピークを越えたものの、「土砂採取」に伴う発掘調査が大きく増加している。土砂採取は山を大きく掘削する事業である。そのため、文化財が存在すれば広大な面積に及ぶ発掘調査は避けられない。

城門記者が現地の最新状況をレポートする。
 昨年度から宮城県山元町に派遣されている
 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
 東日本大震災から5年と4ヵ月。現在の復興はどうなっているのか、何が問題となってきたのかについてレポートする。



記者が派遣されている宮城県亙理郡山元町は宮城県内の小さな町である。写真の通り、浜沿いの集落は壊滅的な被害を受けたため現在は居住地とはせず、町内の3か所に集団移転する方向で整備が進められている。そのうちの山下地区では住宅の整備が進み、先日は浜沿いからの避難道路である「つばめの杜大橋」も開通した。

東北各地の圃場整備など、土を必要とする事業は、あと5年間ほどはかかる見込みであり、本町の土砂採取に伴う発掘調査もまだまだ続くものと考えられる。復興のために使う土ではあるが、民間業者が採取するため民間事業と見なされて「復興」の進捗度合いには反映されていない。他にも、福島県では原発事故による居住制限地域の復旧・復興がようやく始まっているが、現地在元の住民は全員避難しており、発掘調査や文化を伝え護つていく担い手がない。数字やニュースでは示されない復興の姿をどう伝え、進めていくのか、まだまだ課題は多い。(城門記者)



つばめの杜大橋 坂元地区の新市の開通式 街地(工事中)



浜沿いの道 震災遺構として残す民家はない 予定の中浜小学校



【地震雑感】
 平成28年3月11日、14時26分、山の中で地元の作業員さんたちと試掘中であった。サイレンとともに黙とう。普段は野球の話や茶々を入れたりなど何気ない話をしていた皆はあの震災を経験し、身近な人を亡くしている。私は一人経験しておらず、どういう気持ちで目を閉じたらいいのか、何とも言えない気持ちになった。同年4月14日「熊本地震」発生。実は益城町から15キロほどしか離れておらず、連絡もつかない。幸いけがはなかったものの、水・ガスが使えない。それを話すと、水の節約術やあった方がいいもの・震災当時困ったことを皆が教えてくれた。これももつと語られるべき一つの教訓であろう。

東日本大震災 津波による浸水状況図
平成23年3月11日 14:46発生 M9.0



角田市

太平洋

凡 例	
常磐自動車道 (供用区間)	
常磐自動車道 (工事区間)	
国道	
県道	
JR常磐線	
浸水区域	

新地町
福島県